研究

龍渓矢野文雄先生（九）

佐伯史談会
積助会員　山内武麒

社会改良に関心をもつ

龍渓先生は帰朝後、無任所公使という閑職についた。その頃の先生の関心は社会改良にあった。元来先生は、常に最善の社会組織はどうあるべきかを思索し、現在の社会の欠陥はどこにあるか、またどんな改善方法を講ずればよいかと絶えず研究していた。そこで明治三十三年（一九〇〇年）の秋、「矢野龍渓時事意見」と題する菊判四十六頁のパンフレットを、知友や諸新聞に配布した。

その意見書は

「余が将来大いに力を尽したく思う問題とは、四級団の状態を改善する事業」

といい、四級団とは第四階級の訳語であろうが、この語は賃銀労働者から中産階級を含むものと広義に解している。五千万の人口中少なくとも三千万はこの階級の人たちで、

「国の基礎の多分を形づくるは何人も争い能わざるところ、而して静かに世の状態を察すれば基礎の腐朽するのを顧みずして、其の上に架設する楼台の中に長舞し居るの観なきを得る乎。」

と、社会改善を説いている。

著者龍渓先生は、社会共和主義、国家社会主義、クリスト教社会主義、パテルナリズムを挙げて説明し、自分は、

「帝王及び国家を中心とし、之に頼て以て諸団体の調和を謀りつつ、四級団の状態を改善せんと欲する。」

と国家社会主義の立場に近いことを述べ、またこの事業が政党の餌にならないよう、政党と結びつけて運営することを拒否した。

「四級団を改善する仕組」とは何か。先生は次の八か条をあげている。

一、四級団（小作人、労役者、工作者及び一人にて地主と小作を兼ね、又は小資本を用い一人にて職主職工を兼ねる者）の為に制令を以て、その疾病、死亡に関する一大強制保険の仕組を設くること。

二、施薬所の制を定むること。

三、四級団の中にて小地主と小作人とを兼ねる者及び小作人並に財主職工を兼ねる者に対し、肥料、種穀、農具、工具の貸付を為し及び販売を為す制を設くること。

四、地主と小作人と合意の場合には国は公債を以て土地を買上げ、年賦にて小作人に売渡し、又は永久国有として之を貸渡すの制を設くること。

五、労役者の集配を掌り、之を就業せしめ、これを保証する取扱所を設くること。

六、四級民の為めに農業工芸に関する簡易教育の法を設くること。

七、四級団をして中央及び地方議会に選挙権を有せしむること。

八、四級団と他級団との間に立ち其の調和を計り其の紛

争を治むること。

これを要約すると、一、二は社会保険、三、四は経済保障、五は職業安定、六は実業教育、七は普通選挙、八は労働委員会のようなもので、現代の時勢から見れば批判されるところはないでもないが、その頃即ち今から七十余年のむかし、資本主義の欠陥を是正する社会政策として、まことにすぐれた卓見であり、先覚的な意見であったといわねばならない。これが公にされ、世の警鐘となって識者を目ざましたのである。

龍渓先生は資本主義制度の欠陥を認め、当然あるべき姿の社会はどうあるべきかを考えた。

「そもそも社会最善の組織は、最大の生産と最良の分配とを得るに外ならぬ。社会主義は分配に宜しく、資本主義は生産に便利である。故に両者の長所を採って、最大の生産をなし、最良の分配をなすことにつとめるならば、始めてここに人類が幸福な運命を持つことができるであろう。若しこの最良方法を発見する学者があるならば、その人こそ、人類の救世主というべきである。」

と。しかし、「これは最も重大な問題であるだけに、容易に解決することは困難だが、ともあれ、自分が年来研究して出来ている腹案だけでも、これを世の中に発表して警告を与えたら、多少参考になるであろう」と思った。こうした見解のもとに上梓されたのが「新社会」であった。

「新社会」の第一版の出たのが明治三十五年（一九〇二年）七月五日である。その本の自序に

「……物窮マレバ必ズ変ズ。変ジテ而シテ復タ窮マル。誰カソノ極ヲ知ラン。孟爾（モール）ノ『優都美（ユートピア）』ハ遂ニ是ニ至ルニ由ナシ。我新社会ハ遂ニ是ニ達スルノ日ナキ乎。昔シ喇撒爾（ラッサル）其ノ言ノ実行ヲ五百年ノ後ニ期ス。世勢ノ変、或ハ百年ヲ待タザラントス。万岳、河ニ帰シ、百川、海ニ入ル。静カニ万物ノ化ヲ観、深ク人事ノ事ヲ察ス。亦タ読書人ノ一楽タラズンバアラズ」

といっている。

「新社会」に描かれたいわゆる新社会は、一つの社会主義社会である。もっと正確にいえば、国家社会主義と民主社会主義とをうまく組み合せた社会組織を具体的に示したものである。従ってこの新社会実現の手段も漸進的であり、急激な変革を避けている。その上描く「新社会」は「立憲帝国主義」であるところに一つの特色がある。また普通の社会主義は一国だけでは行うことがむずかしいのに、先生の新社会は一国ぎりで可能であるように仕組まれている。この書は、矢野先生の公正な済世の見地から、人類の悠久な幸福を目標として執筆したもので、その間に階級闘争を使嗾したり、労働階級を煽動したりするところは少しもなかった。かゝる本には、当時往々にして官権の弾圧がひどく、発行禁止になることが多かったが、この書に対しては少しも手出しができなかった。

この書が出版されると、いやしくも新時代を口にするもので、この書を手にしないものはないといわれ、津々浦々まで喧伝されて、再版また再版、半年たたぬうち早くも二十数版を重ねたという。社会思想史を書く人の多くは、この書を以て日本に於ける社会主義文献の鼻祖であると称している。

先生はその後、この「新社会」の文章をやゝ平易に書き改めて「通俗新社会」と題して、三十六年（一九〇三年）三月に出版した。

龍渓先生は常に言っていた。

「社会の組織に欠陥があるから、貧乏人も生れ、罪悪人も出るのだ。社会改造して欠陥をなくしたら、今の世の貧乏人は八九割減り、罪悪の八九割を防ぎ得るであろう。欠陥をそのままにしておいて、貧乏人に慈善を施しても、罪悪に刑罰を厳格にしても、それはまことに愚かなことである。先ず何よりも社会組織の欠陥を改めることが先決だ。」

と。また

「社会組織に於ける第一の目的は、世に貧困者をなからしむることである。世に貧困者がなくなれば、憂えない世界が出現する。なおこの上に、より多くの幸福を社会に与える組織がありそうだ。若しこの組織を発見できたら、それこそ人生至上の幸福の所在地を示すものので、人類が将来幾千年の末に到達し得る極致であろう。われわれは、われらの後に生まれ来るものたちの為、今少し社会組織の改善に心血を注ぐべきではあるまいか。」

と説いていたのである。

この頃から、先生は雑誌にも関係するようになり、その関係した雑誌のうち特に著名なのは「近事画報」であった。

由来先生は趣味として絵画を好み、絵画に対しては一見識をもっていた。在英中ロンドンで有名であった「グラフィック」などを愛読していたが、それは毎週絵画をもって時事を報道するもので、興味のうちに世界の動きを知らせることに品のよい雑誌であった。先生は日本にもこんな雑誌が欲しいものだとその頃から思っていた。「新社会」を出版した翌年、ある書籍会社から新しく雑誌を発行したいので、先生のお智恵を拝借したいと、先生に教えを乞うた。それで前から考えている絵画雑誌をすすめると、喜んで早速発行することに決め、先生を顧問とした。先生は当時洋画界の泰斗と称せられた小山正太郎を引張り出して、「近事画報」と題する週刊の絵画雑誌を発行させた。先生はその雑誌に随筆や読物を書いたので、忽ち人気を呼び、小山一派の彩筆と相俟って見る見るうちに売れ出した。その上日露戦争が起こり、毎号戦地の状況を写真や絵画で報道したので、人々は争ってこれを講読し、すばらしい発行部数となった。

先生はまた編輯主任として国木田独歩を推せんしてこの雑誌社に入れた。この国木田はこの時より六七年前、先生が徳富蘇峰の紹介で、郷里佐伯の鶴谷学館の教師として入れた男である。

独歩は「奈何にして小説家となりし乎」の中の一文に、

「親父の脛を噛りながら二十二才まで東京で煩悶をやっていましたが、それも出来なくなりまして、遂に矢野龍渓先生の推薦で先生の郷里、豊後の佐伯で英語の教師をやって一年ばかりいました。」

と記してある。独歩は佐伯を僅か一年足らずで去り、帰京して後もよい職がなく、まだ文名も出ない折で生活にも窮していた。これを見た令弟の小栗貞雄が先生に推挙したのである。独歩がこの「近事画報」の編輯主任になったことは、彼が後、文壇にその名を出した大きな機縁となっている。雑誌の売行きにつれて独歩の名は次第に全国に知れ渡ったのである。この雑誌は「婦人画報」「講談雑誌」なども発行した。

大阪毎日新聞との関係

龍渓先生は、その後雑誌社の顧問をやめて、間もなく

再び新聞社と関係するようになった。それは大阪毎日新聞社である。

大阪には明治九年頃から「大阪日報」という新聞があったが、余り振わなかった。二十一年に大阪の実業家たちが出資してこれを継承し「大阪毎日新聞」と改題した。ついで大阪実業界の重鎮藤田伝三郎らもその出資者に加わったので社の基礎は固くなった。

改題当時、東海散士柴四郎が主筆をしていたが僅か半年ばかりで去り、そのあとの経営陣にはいろいろと出入りがあった。

明治三十三年の八月、憲政党が解散され、伊藤博文を総裁とする新たな立憲政友会が組織された。その当時大阪毎日新聞社長をしていた原敬は、この政友会の創立に参画し、そのあと党務を見ることになったので同社長を辞任した。その頃「大毎」の重役で実際に社務を統轄していた本山彦一が、龍渓先生を訪ねて、新しい大毎社長になって呉れと頼んだ。新聞事業には深い興味と卓抜な手腕をもつ先生であるから、喜んで引受けようとしたが、主なる株主の間にこみ入った事情のあることを知って断った。

この後、明治三十六年（一九〇三年）に本山彦一が大毎社長になり、社の事務一切を統率して、社運は益々隆盛に向かい、発行部数は非常に増した。

およそ大阪発行の新聞は、主な政治種や社会種を凡て東京から求めるので、東京には本社に劣らない支局を置く必要があり、新聞編輯の半分は東京にあるといってよい。こんな支局があるなら東京で新聞を発行することは易い。大阪朝日新聞は先年その支局を拡張して「東京朝日新聞」を発行している。「大阪毎日新聞」も遂に明治三十九年（一九〇六年）十月に東京から一新聞を発行することになった。これが「東京日日新聞」であった。

先生と本山とは旧知の間柄で、本山が慶応義塾の学生であった頃からの知りあいで、ずっと親しく交際もしていたし、五六年前の社長問題のこともあったので、本山は龍渓先生に大阪毎日の株主に加わって、東京から発刊している新聞を助勢して呉れまいかとすすめた。先生は新聞には若い時分から縁故の深い身であるから、喜んで引受け、毎日新聞の株主となり、同社の相談役となった。

本山は、本来事業の経営に長じている人で、就中、新聞経営に於いては、かつて福沢諭吉から選ばれて時事新報の営業を托されて、大きな成果をあげ、非凡な手腕を示した人である。また新聞経営に抜群の才がある髙木利太が専務としてこれを助け、編輯方面には渡辺台水、菊池幽芳、若手には渡辺巳之次郎、髙石真五郎、奥村信太郎など多士済々で、その上欧洲大戦後の好景気時代を迎えて、社は急速に隆盛となり、資本金は五百万円と増資され、一年間の売上げは二、三千万円に達して、世界でも屈指の大新聞社となった。この頃先生は、常任監査役に選ばれていた。大正十三年（一九二四年）十月には、老令七十四才の龍渓先生は懇望されてとうとう副社長となり、主として「東京日日」の重要社務をみて社長を補佐していた。

その頃の先生は常にいっていた。

「自分も新聞には多少経験はあるが、しかし自分が関係した時代は実に小規模で、今日のように何百万という収入時代とは、まるで比較にならぬ。だから今日の経営方法は、往年のような道楽半分のわけにはいかない。本山社長、髙木専務の経営手腕にはただただ敬服の外はない。とても自分らの及ぶところではない。自分も尽したいと思うが、何も出来ないことを恥じて

いるじ
と謙虚な態度で、なるべく若い人々の邪魔にならないようにしていたとのことである。

龍溪先生はこうして気楽な副社長の椅子にいたところ、大正十五年（一九二六年）の秋、郊外の親戚の家を訪問する途中、乗っていた自動車が京王電車と衝突して、運転手は即死し、先生も重傷を負うて人事不省に陥った。しかし幸いにも意外に早く恢復して、半年後には外出も出来るようになった。先生が七十六才の時の出来ごとであった。

翌年昭和二年（一九二七年）の暮、副社長の任期が満ちたかでその職を辞した。大阪毎日新聞社は先生の功に報いるため、相談役なる名誉職につけ、前職の待遇を与えることとした。この後は社用がある時に限って本社に出向くことにしていた。

先生には宮城県に別荘があったので、夏になれば其処に避暑をされ、その外は春秋の好季節に社用を兼ねて京阪の間を行楽して、風月を楽しむという、まことに気楽な晩年を送られていたのである。

かような悠々自適な生活を送っておられた龍溪先生も遂に病魔のおかすところとなり、夫人を初め近親の方々の手厚い看護の甲斐もなく、遂に不帰の客となられた。時は昭和六年（一九三一年）六月十八日で、行年八十一才であった。

夫人は佐久間氏で男子といい、六男一女の子宝に恵まれていた。

先生の著書は余り多くないが、大小合せて十余ある。次の通りである。

西洋偉人言行録、演説文章組立法、訳書読法、経国美談、日本文体文字新論、周遊雑記、龍溪随筆雑纂、出麹目之記、浮城物語、新社会、脚本花吹雪、西洋吾主言行紀略（未刊）

（未完）

文書紹介

寛龍公の書簡（新発見）

所蔵者 会員 河野松男氏

> 五月十五日の用書今夕相達候 遂
> 初堂集節右衛門江申付出来ニ付差
> 越相達候 宜致出来候旨可申聞候
> 袖珍方蔵中に有之候由右は序に天
> 王寺屋江可返旨文之丞に可相達候
> 其余申越候趣共一々聞届候 右申
> 遣候 以上
> 六月十一日
> 書物奉行共江
> 尚申候 蔵書虫入損し等無之旨聞
> 届候 尚又精々心被附 火ノ元別
> 而入念可申候 当年は例ゟ炎暑烈
> 敷候 其境如何ニ候哉 自重専一
> 存候 以上
> 封
> 関谷典左衛門殿
> 水許茂兵衛江

五月十五日の手紙今夕届いた。遂（中国の県名か）の初堂集（書物の名）、節右エ門に申付け、出来たので送って来た。よく出来たと伝えて欲しい。袖珍（小型本）の方は蔵（佐伯文庫の書庫）にある由、それは序に天王寺屋（本屋）に返すよう文之丞に伝えられたい。その外申越されたこといずれも承知した――（以下省略）

筆跡といい、文章といい、佐伯文庫八万巻の集書をなさった佐伯藩第八代高標候の手紙に相違なく、しかもまだ紹介されたことのない、新発見の資料で、河野会員の史料追求の、近来最大のヒットであると思う。とりあえず。

（羽柴）